



停滞感・閉塞感の打破に向けて

●
宮村一夫 Kazuo MIYAMURA

東京理科大学 名誉教授, 日本化学会 理事, 化学遺産委員会 委員長



英国はEUから離脱すべきか、その是非を問う投票当日、スコットランドのグラスゴー大学での学会で講演した。偶然ではあるが、歴史的なイベントに現地で立ち会うこととなり、思い出深い学会となった。会場のグラスゴー大学は1451年設立。日本では室町時代にあたる中世に始まり500年以上という世界屈指の歴史を誇る大学である。学会の合間には学内を探訪するツアーが開催され、かつて教鞭をとった経済学の祖とされるアダム・スミスの銅像や、温度の単位に名を遺すケルヴィン卿（ウィリアム・トムソン）が使っていた研究室などを巡りながら、大学の過去、現在、そして将来計画が紹介された。日本からの参加者に向けては、東京大学工学部の前身、工部大学校に教員（ヘンリー・ダイアー）を派遣して日本での大学設立に大きく貢献したことにも言及。こちらとしては感謝し、恐れ入るばかりだった。

海外から招聘した学者の助けを借りながら、日本は学術、産業の両面で科学技術の種をまき、アジア諸国の中でいち早く、繁栄の礎を築くことに成功した。今までに認定された化学遺産、全64編をご覧いただければ、その発展の歴史を辿ることができる。特に今回認定された、アジア初のノーベル化学賞を受賞された福井謙一博士関連の化学遺産は、まいた種が芽吹き、しっかり根付いて花開いたことを示すものと言えるだろう。

しかし、最近、様子がおかしい。バブル崩壊後、産業界での研究活動がコストカット中心となり、新製品の開発がおろそかになった結果、魅力ある製品が減ってしまった。ウリであった高品質のイメージは失われ、検査不正まで横行。賃金も抑えられて、いつの間にか低価格で粗悪な製品を供給する発展途上国型の産業構造に陥ったように見える。学術においても「役に立つ」研究を指向する傾向が強まり、プロジェクト研究が花盛り。地球温暖化、太陽光発電、SDGs、車載用電池、などに研究対象が集中し、日本全体でみると壮大な研究費の多重投資をしているように感じられる。「役にしか立たない」研究が増えて、未知の現象の探索や解明といった、成果が得られる保証はないものの、学術の本質的な発展を促す研究が少なくなっているはいないか。唯我独尊。山男が未踏の山に登るがごとく、各人が行いたい研究に没頭する。それでよしとする空気が昔の大学にはあった。

時が進むにつれ、そんな時代を知り、語れる研究者も減っていく。化学遺産委員会ではコロナ禍の下、中断を余儀なくされていた化学の語り部（オーラルヒストリー）事業を今年度から再開することにした。研究現場に漂う停滞感・閉塞感を打破する一助となることを期待している。

© 2023 The Chemical Society of Japan